

黙示録2章1-7節 「愛から離れた教会」

1A 教会の真ん中におられる方 1

2A 労苦と忍耐 2-3

1B 偽使徒たちとの戦い 2

2B 忠実な献身 3

3A 初めの愛 4-6

1B 優先順位のずれ 4

2B 思い出す必要 5

3B ニコライ派への憎しみ 6

4A 勝利ある者 7

本文

黙示録2章を開いてください。私たちの黙示録の学びは、今晚から 2 章に入ります。主が、アジヤにある七つの教会に対して、お語りになりたいことを見ていきます。今晚は 2 章 1-7 節です。エペソにある教会に対するイエス様の言葉です。まず、初めにすべてを読みましょう。「¹ エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を握る方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる—。² わたしは、あなたの行い、あなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが悪者たちに我慢がならず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちを試して、彼らを偽り者だと見抜いたことも知っている。³ あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れ果てなかった。⁴ けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。⁵ だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行って、あなたの燭台をその場所から取り除く。⁶ しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。⁷ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。』」

主が、ご自分の栄光の姿をお見せになり、ご自身が戻って来られることを宣言されて、教会に語られている言葉です。まずご自身の栄光を見せ、それから、彼らのわざを示されます。エペソの教会では、「労苦と忍耐」を知っているとされますね。七つの教会にすべて共通しているのは、教会にある「わざ」を評価されることです。イエス様が、山上の説教で「天における報い」について語られましたね。迫害を受けたら報いがある。また、隠れたところで行っていることは、天の父が見ておられて、報いてくださる、ということです。

そして、次に「責めるべきことがある」ということです。イエス様が天に昇られてから、60 年ぐらい

経ち、そこで、足りないこと、欠けていることをイエス様が示しておられます。この叱責は、七つの教会で五つの教会でお語りになっています。悔い改めを呼びかけておられます。ペテロが第一の手紙で、「4:17 さばきが神の家から始まる時が来ているからです。それが、まず私たちから始まるとすれば、神の福音に従わない者たちの結末はどうなるのでしょうか。」主が来られる時に、また、その前にも教会に対する裁きがあるのだよ、という警告であります。

そして、イエス様は励まされます。「勝利を得る者には」と言われていますね。七つの教会すべてに、打ち勝つ者に対する約束が与えられています。ヨハネ第一にも、「5:4 神から生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。」とっていました。勝利を得た後に、天のエルサレムや神の国おける報いを、イエス様はそれぞれの教会に与えておられます。

このようにして、第一に、ご自身の栄光を示し、第二に、教会のわざを示されます。第三に、欠けたところがあれば、それを叱責し、悔い改めを呼びかけられます。第四に、勝利する者への約束をくださいます。

1A 教会の真ん中におられる方 1

¹エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を握る方、七つの金の燭台の間を歩く方が、こう言われる—。

初めに、主が語られているのは、「エペソにある教会」です。主がヨハネに語られている、パトモス島から最も近いところにある港湾都市です。ここは、「アジアの中心地」と呼ばれたほど、ローマ帝国の中でも突出した町でした。今でいうなら、ニューヨークのような存在です。アジアからの隊商の道の先端にあり、ここからローマへの貨物が運び出されます。裕福で、活気のある港を有していました。2万5千人を収容する劇場がありました(使徒 19:29)。アゴラと呼ばれる広場があり、



商品の売買が行われていました。またローマで第三に大きい図書館「ケルスス図書館」もあります。

同時に、ローマ帝国の他の大都市にもある大きな問題がありました。非常に異教的だ、ということです。アルテミスという豊穡の女神が祀られている、「アルテミス神殿」は、世界の七不思議の中に入られています。数多くの柱があり、

そして奥にアルテミスが祀られています。数多くの乳房がぶらさがっているグロテスクなものです。けれども、アルテミス信仰は根強い人気があり、参拝客は地中海沿岸の全域からであり、絶大なものでした。そして、その神殿の周囲で商売が行われています。パウロがそこで宣教していた時に、信じた人々は偶像を捨てていったので、アルテミス神殿の銀細工人が商売あがったりで、それで騒動が起きました。そして、そこは性的な乱れが当たり前のように起こっていました。そこにいる巫女、女祭司は売春婦でした。アルテミスのお祭りが例年行なわれていましたが、その時は乱痴気騒ぎが起きます。そしてケルスス図書館の隣には遊郭があります。売春宿ですが、それが大通りの中心部のところに堂々と立っています。そんな中に、キリストの教会が生まれたのです。

そしてローマには、皇帝礼拝がありました。ローマ帝国を一つに治めるために、その統合の象徴として皇帝を主として、救い主として信じる信仰を養っていました。アゴラに入る所には、皇帝を神として捧げるための香を焚く場があり、そこで焼香を済ませてから中に入ることができます。これまた、キリスト者にとっては大きな試練だったでしょう。そして皇帝に礼拝を捧げないものなら非国民扱いされ、それで 12 節以降にあるペルガモンにある教会では、殉教者も出ています。この日本も、非常に経済が発達した町、文化や学問も秀でている都ですが、けれども異教的なものの影響は計り知れません。ですから、状況は我々、この日本、そして大都会、東京に住んでいる者たちにも身に迫るものがあるのです。

しかし、キリスト者はそんななかで信仰と希望によって支えられ、またキリストの愛に満たされて世に対して証しをしていました。ローマには恐ろしい慣わしがありました。ごみ収集所に、生まれたばかりの赤ん坊を日差しに晒して、そのまま捨てて良いという法律がありました。今は、それが中絶という名でまかり通っていますが、当時はもっとグロテスクであります。特に、アルテミス神殿で商売をしている巫女たちは望まぬ妊娠をしたら、ここに赤ん坊を捨てていました。しかし、そんなところにやってきて赤ん坊を救い出していたのは、キリスト者たちです。また、悪霊の生きている場所もありました。また別の神殿ですが、そこで悪霊を呼び寄せる場所があり、オカルトが流行っていました。ですから、パウロが福音宣教をしていた時に、悪霊追い出しの記述が、使徒 19 章にあります。そして、魔術を行っていた者たちが書物を焼き捨てたことも書かれています。それでエペソの教会に対してのパウロの手紙には、霊の戦いとして、悪霊どもが空中にいて生々しく描いているのです。

そのエペソに、強い教会が建て上げられたことは、私たちが使徒の働き 20 章を読んだ時に学んだことであります。使徒 18 章には、パウロが短期でここを訪問し、福音宣教をしました。そしてアポロが来て、そのアポロをアクラとプリスキラが教えました。そしてパウロが、アポロによって教えられた 12 人の弟子に出くわし、彼らがイエスの御名によってバプテスマを受け、また聖霊の賜物も受けました。そして驚くべき業が行なわれます。パウロは、ローマに捕えられた時に、エペソにいる兄弟たちに対して、彼らの持っている霊的豊かさ、キリストにある神の祝福がいかにすぐれて

いるかを、エペソ人への手紙で書き記しました。

パウロはエルサレムに行く途中で、その長老たちを呼び寄せ、最後の言葉を語りました。「使徒 20:27-30 私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。28 あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。29 私は知っています。私が去った後、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、容赦なく群れを荒らし回ります。30 また、あなたがた自身の中からも、いろいろと曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こってくるでしょう。」このように、偽教師たちが教会から出てくるといことを彼は予告しました。果たして、そうした者たちがやってきて大変なことになっていたことが、次の牧会者テモテが対処したことで分かります。テモテへの手紙第一と第二には、違ったことを教えて論争をしかけている者たちがいて、信仰から離れてしまった者たちの姿があります。

ですからエペソにある教会は、パウロが教会開拓をして、そしてテモテに引き継がれたところがあります。そしてさらに、使徒ヨハネに任されたことが聖書ではないですが、他の文献で明らかにされています。したがって、パウロ、テモテ、そしてヨハネによって牧会を受けた、筋金入りの教会でした。信者たちは、大きな試練と戦いを内外に受けていたけれども、それにまさる励ましと健全な教えを、しっかりと持っていた教会だったのです。そのような中で、主が与えられた言葉です。

使徒ヨハネに栄光の姿でイエス様が現れてくださいましたが、その一部をもってご自分を示しておられます。一つは、「[右手に七つの星を握る方](#)」です。そして、「[七つの金の燭台の間を歩く方](#)」です。右手に星を握っているということは、主イエスご自身が、エペソの教会を支配しておられるということです。ご自身の御手の中に権威を持って入れておられるということです。私たちも、主の手の中に自分たちがいることを知らないといけません。そして、燭台の間を歩いているということは、主が私たちの間を歩いておられるということです。そうやって、私たちを見ておられます。

2A 労苦と忍耐 2-3

1B 偽使徒たちとの戦い 2

² わたしは、あなたの行い、あなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが悪者たちに我慢がならず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちを試して、彼らを偽り者だと見抜いたことも知っている。

イエス様は、「あなたの行い」を知っているとされます。これは、主に仕えているキリスト者にとっては、深い慰めを得ます。他の人からは評価されず、見られていないかもしれませんが、しかし主は、知っておられます。迫害の中にあつたヘブル人の信者に、ヘブル書の著者はこう言いました。「ヘブル 6:10 神は不公平な方ではありませんから、あなたがたの働きや愛を忘れてたりなさい

ません。あなたがたは、これまで聖徒たちに仕え、今も仕えることによって、神の御名のために愛を示しました。「労苦」とは、「まさに力尽きて倒れんとするばかりの働き」という意味のギリシア語が使われています。そして、「忍耐」は、「不動の持久力」を意味します。いろいろな困難があっても、それをしっかり受けとめて、そこにある恵みによって強くされています。

そして、先にも言及しましたように、エペソの教会には狼が入って来ていました。「悪者たち」とは、偶像礼拝や淫らな行いを受け入れてしまっている者たちのことを指しているのでしょう。そしてエペソにある教会で最も厄介だったのが、偽使徒であります。先にパウロが警告し、テモテが対処した、あの偽教師たちであります。これを見抜く時には、とても辛い作業をとります。しかし主は、そのような者たちが予め現れることを知っておられて、「マタイ 7:15 偽預言者たちに用心しなさい。彼らは羊の衣を着てあなたがたのところに来るが、内側は貪欲な狼です。」と言われるのです。

2B 忠実な献身 3

³あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れ果てなかった。

これは、いかに彼らが忠実であったかを示しています。イエスの御名のゆえに、献身的に働いてきました。疲れ果てるとは、もうあきらめて、信仰によって前進することをやめてしまうことです。ちょうど、長距離走で脱落することなく、主に対する信仰を保ってきたということです。

3A 初めの愛 4-6

1B 優先順位のずれ 4

主は、このように献身や忍耐に対して、彼らを評価しておられます。しかし、エペソの教会には大きな問題がありました。なかなか目に見えない霊的な問題です。それは優先順位と言ってもよいでしょう、「愛しているか？」という問題です。献身的に働いても、愛がなければ無に等しいということを、パウロはコリント第一 13 章で話しましたが、それがエペソの教会で起こっていました。

⁴けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

パウロやテモテが長い期間かけて教えていった教会です。健全な教えにおいても、また献身においてもよく忍耐した教会でしたが、「初めの愛」から離れていました。パウロは、エペソ人への手紙を書いた時には、キリストの愛を知るようにと祈っていましたね。「エペ 3:17-19 信仰によって、あなたがたの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように。そして、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、18 すべての聖徒たちとともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、19 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができまますように。そのようにして、神の満ちあふれる豊かさにまで、あなたがたが満たされますように。」ここまで、愛にあふれることをパウロは願っていましたが、いろいろな困難に耐え、特に偽使

徒たちと戦い、その中で愛が冷えていったのです。終わりの日には、愛が冷えることをイエス様は預言されました。「マタ 24:10-12 そのとき多くの人がつまずき、互いに裏切り、憎み合います。11 また、偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします。12 不法がはびこるので、多くの人の愛が冷えます。」ちょうど、船で敵と戦っている時に、船底に穴が空いて、水が入って来てしまっているかのように、愛が冷えていってしまいました。

ここの箇所から説教で興味深い例えを、ある韓国人の牧師さんがしてくれました。「私たちが包丁を研ぐときに、片面だけを研いだら、包丁がだめになってしまう。両面を研いで初めて包丁が使える。」ということです。つまり、主の愛の中に満たされ、その中に生きる。そして、主に我が身をお捧げして奉仕をする。この流れの中に留まることが大事なのですが、一つのことに専念しているうちに、肝心要の主イエス様ご自身が全ての中心であり、また、主が全ての事を掌握しておられることを忘れてしまいます。異端の教えに戦わないと思っている中で、主が戦ってくださること、正しい教え以上に、主の似姿に変えられることが大事であることを忘れてしまうのです。

2B 思い出す必要 5

^{5a} だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。

主は、三つのことを命じておられます。一つは、「思い起こす」ことです。何について思い起こすのか？というと、イエスが私たちが愛されたということを思い起こします。「Iヨハ 4:9-10 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちにいのちを得させてくださいました。それによって神の愛が私たちに示されたのです。10 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちが愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」私たちは、このことを思い起こすことを、主ご自身が、最後の晩餐で命じておられました。「Iコリ 11:23-25 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、24 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」25 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」ここの「覚える」ということが、思い起こすことです。そして、互いに愛し合うことについて、主は初めに命じておられました。ヨハネ第一 2 章 7-8 節で、彼は、古い命令ではあるが、「新しい命令として、もう一度あなたがたに書いているのです。」と言っています。思い起こしなさいと勧められているのです。私たちが、何をもってキリストの弟子と認められるのか？互いに愛することによってであるとイエス様は言われました。

そして、「悔い改め」なさいと言われる。これは、思い起こしたことに基づいて、思いを変えること、心を入れかえることです。イエス様は、ユダヤ人の指導者たちと、取税人や遊女たちの違いをこう言われましたね。「マタ 21:28-31 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二

人いた。その人は兄のところに来て、『子よ、今日、ぶどう園に行つて働いてくれ』と言つた。29 兄は『行きたくありません』と答えたが、後になつて思い直し、出かけて行つた。30 その人は弟のところに来て、同じように言つた。弟は『行きます、お父さん』と答えたが、行かなかつた。31 二人のうちのどちらが父の願つたとおりにしたでしょうか。」彼らは言つた。「兄です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに言います。取税人たちや遊女たちが、あなたがたより先に神の国に入ります。」ここでは兄が、行きたくないと言つていましたが、思い直して行つています。

そして、「初めの行い」をしなさいということです。これは、時間的な初めではなく、優先順位としての初めです。つまり、愛するという行いを初めにしなさいということです。イエス様が、いかに私たちが愛してくださつたかを思い起こし、悔い改めて、神の愛が自分に留まるようにします。そして、イエス様が互いに愛し合いなさいということをおもひ起こし、思い直して、具体的に兄弟を愛する行つて行きます。これらの、まず初めにしなければいけないことを初めに持つて行きます。教会が、忍耐をもつて、偽りに対して戦い、労苦していましたが、いつの間にか、この初めのことを置き去りにしてつたのです。なので、思い起こし、悔い改め、初めの行いに戻ります。

^{5b} そうせず、悔い改めないなら、わたしはあなたのところに行つて、あなたの燭台をその場所から取り除く。

主は、いつも私たちに悔い改めの機会を与えてくださいます。初めから教会を裁くのではなく、悔い改めなさいと命じられてから、そして彼らが行いを改めたら、憐れみを注いでくださるのです。けれども、もしそうでなければ、「わたしはあなたのところに行」区と言われます。ここは、ギリシア語で「すぐに」という意味の言葉があります。主がすみやかに、戻つて来られるのですが、その時にエペソにある教会は残されて、そこには、燭台がない状態、つまりイエス様をご臨在されない状態になるということです。イエスご自身がおられない教会とは、恐ろしいことですね。

ところで、教会史においては、エペソの人々が悔い改めであろうことが確認できます。イグナテオスという初代教父が、エペソの人たちについて、こう話しました。「最も聖なるエペソの教会、名が知られ、世界に尊ばれているあなた方、聖霊に満たされて、肉に従つて行わず、全てを御霊によつて行なつて行なつている方々」と書いています

3B ニコライ派への憎しみ 6

⁶ しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。

主は、初めの愛から離れたと言われましたが、けれども、主ご自身が憎まれていることがあります。それは、ニコライ派という人々の行いです。ペルガモンの教会には、この教えが入つていま

した。主の言葉が、「バラムの教え」と共に語られていることがあります。そこでは、偶像礼拝と淫らな行いが書かれています。つまり、こうした異教的なことをしていてもよいのだ、とする、容認する教えがニコライ派であったと考えられます。先に申し上げたように、エペソは非常に異教的な、不道德な町でした。それを行ってよいと容認していたのがニコライ派ですが、イエス様はそれを憎んでおられました。

そして、ニコライ派は、その名前から、「征服」と「人々」の合成語なので、霊的な階級を付けていたのではないか？と思われる。一種のグノーシスのような教えです。霊知を誇り、肉体で行いことは放縦でよいとするものです。そして、霊的な階級を付け、上の者たちは責任を取らない教えを持ち込んでいたかもしれません。しかしヨハネはきっちりと、「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり」と言いました。キリストのからだの一部であり、そのからだで行っていることに責任があるとみなしていました。

4A 勝利ある者 7

⁷ 耳のある者は、御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。勝利を得る者には、わたしはいのちの木から食べることを許す。それは神のパラダイスにある。』

主は、七つの教会全てに、「御霊が諸教会に告げることを聞きなさい。」とされています。つまり、エペソだけでなく全世界の教会に普遍的な言葉として教えておられるのです。それから、「勝利を得る者」の約束も、それぞれの教会に与えておられます。勝利を得る者とは、一部の優れた聖徒たちだけの特権ではありません。先ほど話したように、信じる者、イエスを御子と信じる信仰こそが、世に打ち勝つ勝利なのです。主を信じていて、その愛の中に留まっていることです。

そして約束がありますが、七つのそれぞれの教会に対して、黙示録 21 章にある新しいエルサレム、または 20 章にある千年間のキリストとの統治、千年王国における約束のどちらかが与えられています。ここでは、新しいエルサレムにある、生ける川のそばに植えられている、いのちの木です。主の愛に留まり、最後までイエスを信じている者には、永遠のいのちが約束されているという励ましです。

このようにして、エペソに対するイエス様の言葉を見ました。教会史においても、エペソの教会のようになってしまった時代が、使徒の働きが終わり初代教会の時代がそうであったと言えます。教会において、偽教師らが入ってきたので、見分ける規則を作りました。そうして、異端に対抗するために教えを強調しました。そうしているうちに、そもそも愛によってキリスト者と呼ばれていたのに、そこから離れて行ったのです。現代の教会においても、初めはまとまりがなく、でも愛していることだけに特徴があったところが、制度化されて、教えは正しいけれども、その愛の実が結ばれなくなっていることがあります。初めの愛を思い起こし、悔い改める必要はいつでもあります。